



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3271 号 2016.9.22 発行

障害者支援団体、笑顔の写真つまった機関誌発行 桜井健至 朝日新聞 2016年9月21日



「手をつなぐ」9月号の表紙。障害者とその家族の笑顔をたくさん掲載した=全国手をつなぐ育成会連合会提供

知的障害者とその家族約20万人で組織する「全国手をつなぐ育成会連合会」は21日、会報誌「手をつなぐ」9月号を発行した。相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害された事件を受け、「差別や偏見をはねのける社会にしたい」と、実名でのメッセージを募った。笑顔の写真200枚以上が掲載されている。



「ダウン症の妹が同じ状況に置かれていたらと思うと、心がしめつけられます」。愛媛県の高橋加奈さんはそうメッセージを寄せた。「障害者はいない方がいい」といった植松聖(さとし)容疑者(26)＝殺人容疑で送検＝の供述に対し、インターネット上では同調する意見もあり、東京都の宮沢百合子さんは「本当に悲しくなります」と書いた。

神奈川県警は「障害者施設で起きた事件で、プライバシー保護の必要性が高い。遺族も匿名を強く希望している」として被害者の名前を公表していない。会は匿名を望む家族の気持ちを理解しつつ「誰もがかけがえのない尊い命。お互いの人格と個性を尊重し、支え合う社会を目指すことが大切だ」として、会員に実名でのメッセージと笑顔の写真を募った。東北や四国、中国地方など全国から数百の応募があり、14のメッセージと200枚以上の写真を載せた。

### 安心して暮らせる社会を 知的障害者団体が中区で全国大会

東京新聞 2016年9月22日

「事件を二度と起こしてはいけない」。二十一日、横浜市中区で開かれた知的障害者団体「ピープルファースト」の全国大会は、七月に相模原市の県立障害者施設「津久井やまゆり園」で発生した殺傷事件をテーマに開かれた。千人を超える参加者らは、被害者追悼のためステージに花や折り鶴をささげ、どうすれば障害者たちが安心して暮らせる社会が実現するかに思いを寄せた。(梅野光春、加藤豊大)

会場には1000人以上が集まり、知的障害者の暮らしについて考えた＝中區で



「差別や優生思想があるのは障害者のことを知らなすぎるからではないか」。ステージに折り鶴を手向けた横浜市港北区の五十代の女性は話した。自身は言語能力や身体に障害があり、車いすで生活している。

「小学校では特別支援学級に入れられたが、子どものころから健常者も障害者も同じ学級で交流し、互いに理解を深めるのが早道だと思う」と訴えた。

障害者の自立を支援する「NPOスタジオIL文京」（東京都文京区）のカウンセラー、猿渡達明さん（42）は、脳性まひと注意欠陥多動性障害（ADHD）で、差別を受け続けた経験を持つ。

「現状では、社会が弱い人の尊厳を守っていない」と感じており、植松聖（さとし）容疑者だけでなく社会全体に「生産に使える人は価値がないという考えがあるのでは」と危機感を抱いている。「障害者施設だけでなく、地域で障害がある子どもを育てていくといった施策が必要だ」と話した。

千葉県稲毛区から来た障害者通所施設の支援職員塚本健太さん（23）は折り鶴をささげながら「施設職員として、同じことが絶対に起きないように、障害がある人たちが幸せに暮らせるように」との願いを込めた。「そのためには、障害者自身が声を上げ続ける必要がある」と語った。

障害者施設殺傷事件 知的障害者 1000人が追悼集会 NHKニュース 2016年9月21日



ことし7月、相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件を受けて、21日、全国の知的障害者およそ1000人が参加し、犠牲者を追悼する集会が開かれました。

この集会は、知的障害者でつくる団体「ピープルファースト」が開いたもので、横浜市の会場には、北海道から沖縄まで全国各地から知的障害者およそ1000人が集まりました。集会では、はじめに事件で犠牲になっ

た19人に対して参加者全員で黙とうをささげました。

続いて、参加者の代表らが事件について意見を交換し、このうち、大阪から参加した中山千秋さんは「容疑者の『障害者はいらない』という言葉は、私たちに向けられています。私たちは障害者である前に1人の人間です」と訴えました。また、北海道から参加した土本秋夫さんは「障害者にも輝く人生があります。生まれてよかったと思える社会を作らなくてはなりません」と話しました。

集会を主催した団体では、今後、市民団体などとも連携して事件をテーマにした集会を各地で開催し、障害者に対する差別や偏見をなくすための活動を進めていくことにしています。

この追悼集会は、大阪・東大阪市に住む知的障害者の中山千秋さんが、事件の直後、全国の仲間へ送った手紙がきっかけとなって開かれました。中山さんは、現在、自立支援施設で弁当の盛りつけなどの仕事をしながら、公営住宅で同じ知的障害がある男性と暮らしています。

事件にショックを受けた中山さんは、障害者への差別や偏見の問題を当事者どうしで考えようと手紙を書きました。手紙には、「障害者は生きていたらあかんのか、腹が立ちます。

死んだ仲間たちがかわいそうで、悔しいです」などと記されています。手紙は、知的障害者でつくる団体「ピープルファースト」の全国の仲間へ送られ、これがきっかけとなって21日の集会が開かれました。

中山さんは、先週、重い知的障害がある仲間と話し合い、この中で、「障害者はみんなうまく言葉にできなくても心や頭の中ではちゃんと考えています。このことを社会の人たちにわかってほしいです」と話していました。

### 著名人からもメッセージ

追悼集会を開いた団体は、プロ野球やJリーグの選手などに協力を呼びかけ、障害者への差別や偏見をなくするという動画をインターネットを通じて発信していく活動を始めています。

このうち、神奈川県黒岩知事は「障害者である前に人間だ」というメッセージを書いた色紙を見せながら「差別や虐待をなくすことは非常に重要なことだ」と話していました。また、21日の追悼集会では、Jリーグの横浜F・マリノスや、プロ野球のDeNAの選手からも寄せられた動画などが披露されました。

この団体では、今後、一般の人からも広くメッセージを集め、インターネットを通じて発信していくことにしています。

### 「虐待、差別に立ち向かう」

参加者から約2000羽の折り鶴や花束が事件の犠牲者にささげられた（横浜市中区で）

#### ■障害者団体全国大会 「相模原」の犠牲者追悼

相模原市緑区の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で46人が殺傷された事件を受け、知的障害のある人たちの当事者団体「ピープルファースト ジャパン」（中山千秋会長）のメンバーらが21日、横浜市中区の大さん橋で開催された全国大会で、事件の犠牲者を追悼した。

全国から集まった約1000人が黙とうした後、大会実行委員らが事件後に同園を訪れて撮影した映像を流すなどして、事件概要を説明した。

パネルディスカッションでは、殺人容疑などで逮捕された元職員植松聖容疑者（26）が「不幸をつくる障害者はいなくなればいい」などと繰り返し供述していることも討論のテーマに。実行委員長の小西勉さん（51）は「自分のことだと思い、時には電車に飛び込んで、死にたいと思うことがある」と語り、容疑者の異常な差別的発言に傷つけられた障害者らの胸中を代弁した。中山会長は「虐待や差別、つらいことがあっても、全国の仲間たちと立ち向かっていきたい」と決意を語った。

その後、参加者は献花台に花束や約2000羽の折り鶴を供え、犠牲者に祈りをささげた。横浜市港北区の白川光さん（29）は「本当にひどい事件で亡くなった人はかわいそう。天国では楽しく過ごしてほしい」と話した。

読売新聞 2016年09月22日



### 相模原殺傷 障害者への偏見どう醸成 経緯説明がカギ 容疑者を鑑定留置 神奈川

産経新聞 2016年9月22日

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害された事件で、横浜地検は21日、元職員の植松聖（さとし）容疑者（26）＝殺人容疑で再逮捕＝の鑑定留置を始めた。これまでの県警の調べで浮かび上がる犯行の計画性と異常性。一方的な障害者への偏見がどのように醸成されたのかが事件説明のカギとなる。地検は植松容疑者の精神状態を調べる過程で、こうした経緯を幅広い知見から明らかにする方針だ。（川上朝栄）

◆今回は4カ月

精神科医による精神鑑定が行われる鑑定留置の期間は通常2、3カ月だが、今回は約4カ月。「医師の意見を考慮した」（横浜地検）といい、責任能力の有無を調べるために綿密な鑑定が行われることになる。

医療機関に入院させたいと、様子を確認したり、本人の病歴、生き立ちなどに関する資料を基に脳波検査や心理テストを行い、知能などもチェック。精神科医が本人に直接面談し、事件当時の精神状態を分析したり、精神障害などが犯行にどのような影響を及ぼしたのかを調べて、鑑定書にまとめる。

精神鑑定の経験が豊富な昭和大学の岩波明教授（精神医学）は「医学的な見地から、しっかりとした情報を捜査機関に提供することが鑑定医の役割」と話す。

#### ◆焦点は「犯行時」

植松容疑者は2月、精神保健福祉法に基づく措置入院となった際に「大麻精神病」「妄想性障害」と診断され、3月下旬に同じ病院を外来受診した際には「抑鬱状態」「躁鬱（そううつ）病の疑い」と診断されていた。

薬物事件に詳しい小森栄弁護士は「これらはいくまで犯行前の診断。鑑定では犯行時の精神状態がどうであるかが焦点になる」としている。

一方、岩波教授は「精神障害がどの程度影響を与えたのか見極めなければならない」としながらも、「自分の意志で薬物を摂取し、精神障害を引き起こしたとするのなら、『刑事責任能力あり』とみなされるのではないかとみる。

#### ◆善悪判断は？

捜査関係者によると、精神障害の影響が大きく、善悪の判断が全くつかない「心神喪失」と診断された場合、刑法で「心神喪失者の行為は、罰しない」とされているため、無罪となる可能性が高い。また、精神障害の影響を受け、善悪の判断能力が著しく低下している状態である「心神耗弱」と診断された場合は減刑の対象となる。

ただし、偏った人格に起因するものと診断された場合は「責任能力がある」として、減刑対象とならない可能性があるという。

事件の全容解明に向け、地検は「精神医学だけでなく、社会心理学の専門家にも、（植松容疑者が）なぜ極端に偏った考えを抱くようになったのか意見を聞きたい」としている。

### 障害者施設殺傷事件で逮捕の元職員 精神鑑定へ NHKニュース 2016年9月21日



ことし7月、相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、殺人の疑いで逮捕された26歳の元職員の男の刑事責任について調べるため、専門家による精神鑑定が行われることになりました。

この事件は、ことし7月26日の未明、相模原市緑区の知的障害者の入所施設「津久井やまゆり園」で入所者が刃物で刺されて19人が死亡、27人が重軽傷を負ったもので、警察は、施設の元職員、植松聖容疑者（26）が犠牲者全員の殺害に関わったとして逮捕し、事件の全容解明を進めています。

これまでの調べに対し、植松容疑者は容疑を認めたいと、事件の動機として障害者を冒とくする内容の供述を一貫して続けているということです。また、事件の5か月前に殺害を計画する手紙を書いていたことから、「他人を傷つけるおそれがある」として、本人や家族の同意がなくても強制的に入院させる措置入院をしていました。

こうした状況を踏まえ、横浜地方検察庁は、刑事責任について詳しく調べる必要があるとして、精神鑑定を行うことになり、植松容疑者は、21日朝、勾留されていた警察署から鑑定を行うための施設に移されました。専門家による精神鑑定は、来年1月までの4か月間行われる見通しで、検察は鑑定結果などを踏まえて起訴するかどうかが判断することになります。

## 障害者施設殺傷事件 施設と県の情報共有中心に検証へ

NHKニュース 2016年9月21日

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件を受けて、施設側の対応などを専門家らが検証する委員会の初会合が開かれ、施設と県との情報共有が適切だったのかを中心に検証し、11月をめどに再発防止策をまとめることを確認しました。

横浜市中区で開かれた検証委員会の初会合には、障害者福祉や防犯対策の専門家、それに弁護士など5人の委員が出席しました。



はじめに、神奈川県黒岩知事が「なぜせいさんな事件を防げなかったのか、関係機関の情報共有や福祉施設の安全対策の在り方を検証し、再発防止策をまとめてほしい」とあいさつしました。会合は非公開で行われ、県によりますと、施設を運営する「かながわ共同会」が、逮捕された元職員の男が犯行を予告するような手紙を衆議院議長宛てに書いていたことや、その後、防犯カメラを設置

し、対策を講じていたことなど、事件までの経緯を説明したということです。

施設の設置者である県は、元職員が書いた手紙について報告を受けておらず、検証委員会は、今後、施設と県との情報共有が適切だったのかを中心に検証することにしています。そして、11月をめどに再発防止策をまとめ、公表することを確認しました。

### 石渡和実委員長「地域社会全体の在り方も議論」

検証委員会のあと、委員長を務める東洋英和女学院大学の石渡和実教授は「障害のある人が安心安全に生活できるよう、現地調査や関係者への聞き取りを通じて、再発防止策のほかにも、福祉を取り巻く地域社会全体の在り方についてもじっくり議論していきたい」と話していました。

## 相模原殺傷 障害者ら議論「同じ人間、名前で報道を」 東京新聞 2016年9月22日

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件を受け、全国の知的障害者ら約千人が参加し、事件について議論する集会が二十一日、横浜市中区であった。「(植松聖(さとし))容疑者が語った『障害者はいらない』という言葉は、子どものころからわれわれに向けられている」。参加者たちは事件を痛みとともに受け止める。事件の犠牲者が匿名となっていることには、参加者から疑問の声も上がった。(梅野光春、加藤豊大)

集会は、知的障害者の当事者がつくる「ピープルファーストジャパン」(事務局・奈良県三宅町)が年に一度、各地の持ち回りで全国大会を開催。今年は横浜での準備中に事件が発生、テーマを差し替えて「匿名報道」「入所施設の立地」の問題について、各地代表の知的障害者ら四人が意見交換するなどした。

大会の実行委員長、小西勉さん(51)＝横浜市＝は神奈川県警が「プライバシーへの配慮」などを理由に被害者を匿名発表した点について「仲間として言いたい。誰が亡くなったか分からない」と発言。「せつかく付けてもらった名前を出してほしい。みんな同じ人間なのに…」と続けた。土本秋夫さん(60)＝札幌市＝も「亡くなっても人間とは扱われず、名前を隠すのは差別だ」と強調した。

参加者からは、全国で施設に入所する知的障害者が約十三万人いるのに、やまゆり園をはじめ、施設が山あいなど不便な場所に多いことへの疑問も出た。中山千秋さん(49)＝大阪府東大阪市＝は「地域で邪魔にされ、行政や親の都合で入所させられることもある」と課題を挙げた。

東京都東久留米市の小田島栄一さんは「あなたは何もできないんだから、施設に行かな

いと仕方ないでしょうと言われたこともあった」と振り返り、「障害者は地域に『いない』と言われる」風潮があると指摘。「知的障害者も地域でのびのび暮らしたい」と求めた。一方で会場から「施設にもいい点はある」という意見も出た。

集会の最後に、参加者が花束や折り鶴を犠牲者に手向けた。大会は二十二日に、障害者施設での虐待事件などをテーマにした分科会を開いて閉幕する。

#### ◆植松容疑者の鑑定留置開始

横浜地検は二十一日、入所者十九人を刺殺した殺人の疑いで送検された植松聖容疑者（26）の精神鑑定を行うため、鑑定留置を始めた。一月二十三日までの約四カ月間。

地検が鑑定を依頼した精神科医が、植松容疑者と面談するなどして犯行当時の責任能力の有無を調べる。この間、神奈川県警は二十七人に重軽傷を負わせた殺人未遂容疑などで追送致し、地検が起訴するかどうか一括して判断する。

植松容疑者は逮捕後の取り調べに、「障害者がいなくなればいいと思った」などと障害者への差別的な供述を繰り返し、大麻成分の陽性反応も出た。鑑定では大量殺害に至った動機や、犯行時に薬物の影響がなかったかなどが焦点となるとみられる。

植松容疑者はこれまでに殺人容疑で三回逮捕、送検された。

#### 不審者侵入想定し訓練 大野の知的障害者向け事業所 中日新聞 2016年9月22日

大野市高砂町の多機能型事業所ほっとが二十一日、施設内で不審者対応訓練をした。相模原市の障害者施設殺傷事件を受けて初めて企画した。

不審者役（手前）に対応し、利用者らを避難させる職員＝大野市の多機能型事業所ほっとで

施設では、知的障害のある人たちが通所で就労や日常生活の訓練をしている。不審者対応訓練には職員十人と利用者二十二人が参加し、大野署刑事生活安全課の福岡善昭生活安全係長が指導した。

訓練は、玄関から不審者が侵入したとの想定。ナイフを手にする不審者役に対し、職員がいすで間合いを取りながら対応する間に、利用者らを就労訓練する部屋に避難させた。施設では訓練で出た課題を検証し、不審者が侵入した場合の避難マニュアルを作成する。



(正津聡)

#### 特別支援校3校新設へ 福岡県議会、代表質問 西日本新聞 2016年09月22日

県議会9月定例会の代表質問が21日始まり、城戸秀明教育長は知的障害のある児童や生徒が通う特別支援学校を今後10年で、県内に3校新設する考えを表明した。うち1校は糸島市に設置する方針。小川洋知事は障害者差別を無くすため制定準備を進めている県条例について「パブリックコメント（意見公募）を行い、早期に制定したい」と述べた。自民党県議団の川端耕一氏と民進党・県政県議団の大橋克己氏への答弁。代表質問は23日も行われる。

城戸教育長は「知的障害がある児童、生徒数は今後10年で3割増加すると推計している。特に福岡地区では6割以上の増加を見込んでいる」と説明。予想される教室不足に対応する必要があるとの認識を示した。

県義務教育課によると、知的障害のある子どもを受け入れる特別支援学校10校の児童、生徒数は2006年度の1405人から、15年度は約1.5倍の2101人に増加。現在は教室増設などで対応している。

教育長は「11月をめどに整備方針を策定したい」と述べた。新設3校のうち1校は保護者からの要望が多い糸島市とし、福岡市内からの通学も可能とすることを検討。残る2校は福岡市東部近郊を想定している。

一方、公的機関に障害者への配慮を義務付けた障害者差別解消法の4月施行を受け、条例制定を目指す県は7月、関係18団体からヒアリング。「差別解消は県民一人一人の努めとの明記が必要」「紛争解決目的の第三者機関設置を」などの意見が寄せられたという。

知事は、さらに今後の諮問機関からの答申も踏まえ「実効性のある条例制定に取り組む」と述べた。

**認知症啓発 温かい光** 読売新聞 2016年09月22日  
オレンジ色にライトアップされた高知城（21日午後7時19分、高知市丸ノ内で）

◇高知城ライトアップ

アルツハイマーをはじめとする認知症への理解や関心を高めようと、21日夜、高知市丸ノ内の高知城天守が認知症啓発のシンボルカラーのオレンジ色にライトアップされた。

世界アルツハイマーデー（21日）に合わせ、県が初めて実施した。県は、認知症になっても住み続けられる地域づくりを目指しており、県障害保健福祉課は「県民の方に関心を持ってもらうきっかけになれば」としている。



評・友田健太郎（文芸評論家） 『ルポ 保健室』 秋山千佳著  
読売新聞 2016年09月22日

「保健室登校」という言葉が一般化して久しい。貧困、虐待、いじめ、性同一性障害など様々な問題を抱えた子どもたちの最後の拠り所となっている中学校の保健室に取材し、今の子どもたちのリアルを活写。成長を見守り、いつか足が遠のけば「元氣な証拠」と受け止める養護教諭たちの姿が感動的だ。教育への希望を描いたヒューマン・ドキュメンタリー。（朝日新書、780円）

**鶴見正夫さん詩とパラリンピック** 宮崎日日新聞 2016年9月22日

子どもの歌の創作活動に取り組み「へのへのもへじやーい」「あめふりくまのこ」などの代表作が知られている童謡詩人の鶴見正夫さんに「スポーツ」と題された一編がある。

「前へ！前へ！ ただまっしぐらに 前へ！ きみの前にはゴールがまつ、単調な手足のくり返しがきざむ栄光へのリズム。大地をけてどれだけ空中にいられるか とべ！より高くへ、からだじゅうをばねにして きみはいま地球の引力にいどむ。（一部略）」。

リオのパラリンピックが12日間の熱戦の幕を閉じた。義足のジャンパーが宙を舞い、車いすのランナーが疾走した。腕がなかったり下半身がまひしていたり全盲だったり、さまざまな障害のあるスイマーたちがトビウオのように泳いだ。

重度の脳性まひなどがある障害者向けに生まれたボッチャという競技には魅せられた。選手が身をよじるようにして投じた球は狙ったポジションに寸分の狂いなくぴたりと止まる。小手先の技術ではない。体幹からきたえるトレーニングがあつて可能な技だった。

鶴見さんの詩「スポーツ」はこんなふうが続く。「手だけを使うのではない、こしでなげる うででなげる 手くびでなげる ときにはあいての力も使う。なげる！集中した力とわざが小さな球をあやつる。大きなからだを 宙におどらせる。」。

パラリンピック選手たちが走り、跳び、投げる姿を活写したようで、感動したさまざまなシーンがよみがえる。金メダルゼロに終わった日本だったがちょっと余韻に浸ってから

4年後に向けた強化策に走りだそう。前へ、前へを合言葉に。

スペシャルオリンピックス日本・細川名誉会長が来県 「共生社会」の在り方スポーツ通  
し知って 大分合同新聞 2016年9月22日

大分でのフロアホッケー普及に意欲をみせる細川佳代子さん=大分市



知的障害のある人がスポーツを通して社会参加を目指す国際組織「スペシャルオリンピックス(SO)日本」名誉会長の細川佳代子さんが来県した。障害のある人もない人も、共に汗を流すフロアホッケーを大分に広



めようと活動する。活動のきっかけや障害者理解について話を聞いた。

一障害がある人へのサポートを始めたきっかけは。

25年前のことです。「知的障害のある子どもが生まれるのは、周りの人たちに優しさや思いやりを教えるため。神様からの贈り物」という牧師の言葉に衝撃を受けました。それまで障害がある人に対してかわいそうだと同情心がありました。とんでもない間違いをしていたのではないかと、思うようになりました。

牧師の言葉は「知的障害のある子どもたちは、多くの可能性や能力を秘めており、周囲が理解しサポートすれば地域で暮らしていける」と続きます。元々好きだったスポーツを通して、言葉が真実かを確かめてみようと思いました。

活動を通して子どもたちには個性があり、できることを多く持っていることを実感しました。

一周囲が障害を理解するために必要なことは。

障害のある人と触れ合うことが大事。関わった経験がないために、どうしていいかわからず無関心になってしまう人が多いのでしょうか。一緒に何かをする機会を設けることで、理解が促されると思います。

一今後の活動目標は。

障害のある人もない人も一緒に楽しめるフロアホッケーを広めています。元々はSOの競技ですが、親子や兄弟が同じチームで汗を流せるよう2005年に連盟を設立しました。長野、山形、熊本には既に支部があります。大分でもぜひ支部をつくりたい。フロアホッケーは、エントリーした人全員が交代でプレーするのが決まりです。レギュラーも補欠もない。排除せず、互いに認め合います。共生社会の在り方を、スポーツを通して知ってほしい。

一大分県では4月、障害のある人もない人も自分らしく生きる社会を目指す条例ができた。誰もが共に支え合って生きる地域にするためにできることは。

条例を生かして支え合う温かな地域社会をつくるのは、そこに暮らす一人一人です。自分には関係ないと思わず、小さなことでも自分にできることを実行すれば、社会は変わります。私も、すべての人が輝くことができる「インクルージョン」社会の実現のために、活動していきます。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行